



297号
2024/10

日中文化交流市民サークルわんりい
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



旧台中駅舎：日本統治時代 1917 年に建設された赤レンガの建物。2016 年に台中新駅舎が誕生し、旧駅舎の「駅」としての機能は終了しましたが、情緒ある建物は残され、出入口も新駅舎とも接続できるなど駅の付帯観光施設として利用されています。（「台北ナビ」から）
(2024 年 4 月 台中市にて 撮影:佐々木健之)

‘わんりい’ 2024 年 10 月号の目次は 18 ページにあります

kāi tiān pì dì
開天辟地

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠君代

今月は、中国の神話ですが、お話としては、3世紀頃に付け加えられたものなのだそうです。

・>・>・>・>・>・>

伝えられる話によると、大昔、宇宙は何の区切りも無くて、どろどろしていて、例えてみれば、殻の無い卵のようでした。18,000年経ったある日、中で眠っていた盤古が“卵”宇宙を切り開き、それによって宇宙に天と地が出来ました。

どれだけ過ぎたか分からないほど長い時間の後、盤古が死にました。彼の左目は太陽になり、右目は月になりました。汗の玉は湖や沼になり、血液は大小の河川になり、髪の毛は草原と森林になりました。吐き出した息は、そよ風と雲や霧になって、美しい地球が出来たのでした。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：言い伝えによると、天地が開かれてから人類が出現した。後に、初めて現れたこと、今までになかったような偉大な事業の喩えとして言うようになった。

言葉の使い方：開天辟地を成し遂げた偉大な英雄たちがいたからこそ、私達が今、平穏で快適な生活をすることが出来るのだ。

・>・>・>・>・>・>

中国の神話と言え、伏羲と女媧という蛇身人首の像が良く知られています。二人は夫婦とも兄妹とも言われ、諸説あって定まりませんが、どのお話も伏羲が女媧と協力して人類を作り、彼らに様々な文明を伝えたお話、つまり中華文明発祥の源を与えてくれた神として有名です。特に八卦の基となる考え方、それまで綱に結び目を付けて伝えていた記録に、文字を使うことなどを教えたことになっています。

伏羲のお話は古くから言い伝えられているもの

で、司馬遷も『史記』の中に採録しています。しかし、今月のお話は、伏羲が人間を作り送り出した場所、天地そのものがどうやってできたのかという、宇宙創成の物語なのです。

盤古は、何もかもが融け込んだ、まるで卵の中身のようなカオスの中に生まれました。盤古が生まれた

時、天と地は接していて、非常に生活がしにくい状態でした。盤古は天と地の上に立ち、天を持ち上げ、地を踏みしめて、毎日1丈ずつ成長し、1万8千年経った時に、天と地はしっかりと分離されて、やっと安定したのでした。

天地開闢に力を尽くした盤古は暫くして亡くなりました。すると、その体から様々な自然が生まれたという話は、道教の思想に通ずるところがあったようで、中国の神話として、後から、新たに作り入れたのだらうと

いう説もあるようです。

何れにしても、盤古のお話は、伏羲と女媧が人類に知恵を授ける前の、宇宙が出来た様子に関するお話で、初めてお目見えしたのは、3世紀ごろの呉の書物だそうです。

この頃までに、中国は国内の戦乱で異民族の力を借りたり、異民族の侵入を受けたりして、異民族の文化に触れる機会があり、その中から、中華文明に取り入れやすいお話をヒントにして、新しく、古いお話が中国の歴史に取り入れられたのでしょ

う。巨人の身体が分解されて、各種の自然に変わる神話は世界中に数多く見られ、これとよく似た話がインドの聖典・叙事詩リグ・ヴェーダに収められていて、それが南アジアに伝えられ、更に中国へと入って来て、中国の文化に合うように仕立て直され、取り入れたのではないかとされています。



挿絵：満柏画伯

『豫報』・『河南』という名の刊行物

文と写真＝村上直樹

今年（2024年）も、去る9月7日と8日、東京の代々木公園を会場に「チャイナフェスティバル」が開催されたので、8日（日）に行ってみた（昨年様子は2023年10月号で紹介した）。日本在住の河南省出身者が作る「日本河南同郷会」は今年も参加し、河南省縁の飲食店による屋台（テント）を2つ出していた（写真下）。一つのテントには「潮汕牛肉」と書かれており、河南省名物の逍遥胡辣湯のほか、涼皮、肉夾饃などが売られていた。上野御徒町にある中華料理店「孫ニ娘潮汕牛肉火鍋」が運営を担当していた。この中華料理店は、(株)FANG DREAM COMPANYが都内に展開するさまざまな業態のレストラン、40余りのうちの1つである。グループの総帥は河南省開封出身の女性起業家・経営者、孫芳氏であり、日本でのその成功物語はメディアでもしばしば取り上げられている。

一方、2つ目の屋台には「画宝剛」のローストチキンと書かれており、こちらは河南省を拠点として中国全土で広く知られている「画宝剛道口焼鶏」という店が料理を作っていた。このチェーン店は中国全土に500以上の加盟店があり、年間一千万羽以上のチキンを売り上げている。当日は創業者の画宝剛氏もわざわざ河南省から来ていた。実は、この店は今年（2024年）の7月13日に東京品川に日本進出第一号店をオープンし、目下、日本におけるブランド浸透を図っている。

チャイナフェスティバルで用意されていたさまざま



（一社）日本河南同郷会のWeChat公式アカウントより



「合文造字」体験でもらった賞状

まな企画の中で、私は中国文化センターが主催する「合文造字」体験コーナーに参加した。指導は甲骨書道の第一人者で「亀鑑塾」を主宰する日本甲骨書道研究会代表・張大順先生である。合文造字とは既存の漢字からなる熟語をあたかも一文字のように構成して、新しい漢字を創造するものである。

写真は参加者が皆もらう賞状である。私は「和平」という一つの甲骨文字を考案した。賞状に書かれた文字は、名前（「樹」の木偏が上に載っかっている）を含めて張先生による。少し細かい話になるが、「和」という文字は甲骨文字に存在する（これが上部に当たる）のに対して「平」の文字は甲骨文字に無い（発見されていない）ので、下部は周時代の金文である。賞状には「『二十一世紀蒼頡の伝人』の称号を授与します」とあり、左下には漢字を発明したとされる四ツ目の聖人、蒼頡の肖像が描かれている。

さて、ここからは、標題に即した内容に移る。昨年（2023年）12月26日に河南省鄭州市にある「鄭州商都遺跡博物院」を見学した際、特別展として「奔流——魯迅博物館蔵黄河流域石刻拓片（拓本）展」が開催されていたことは、すでに今年の3月号の「雑感」で触れた。同特別展では「魯迅与（と）『豫報』、『河南』」というコーナーがあった。程有為・王天獎主編『河南通史』（第四卷）2005年、河南人民出版社；『魯迅全集』（全18巻）2005年、人民文学出版社（インターネット上に全て公開されている）；秦方奇・蓋偉・趙鵬・盛曉玲点校（校訂）『豫報』（点校本）2020年、

中央編訳出版社などを頼りに少し調べてみると、この『豫報』、『河南』が何か、徐々にわかってきた。

清朝末期の1900年代初頭、多くの中国人留学生が日本を目指したことはよく知られている。1901年に日本政府が中国人留学生を正式に受け入れるようになり、とくに1905年に科挙制度が廃止されて、新しい知識を海外に求める機運が高まると日本留学がブームとなった。日本の中国人留学生数は1905年から1920年代までに約8,000人に上った、と推定されている（譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』2016年、白水社）。

当時、東京には、孫文をはじめ、黄興、章炳麟といった、留学生を含む若き憂国の士が多数集まり、資産階級（ブルジョア）民主革命を目指して活動していた（かの秋瑾も当時の留学生の1人であったことは『わんりい』先月号で寺西氏が書かれている）。孫文はすでに、1894年11月にハワイで清朝打倒・共和制国家樹立を目指す「興中会」を結成していた。その後、華興会（1904年2月、湖南）、光復会（1904年11月、上海）など、志を同じくする団体が中国各地で次々と設立された。そして1905年8月20日に日本の東京で、興中会、華興会、光復会が連合して、中国初の資産階級革命政党である「中国同盟会」が設立されたのである。

河南省からの海外（主に日本）留学生派遣は1903年に始まったものの、1904年当時、日本の河南籍留学生はわずか19人に過ぎなかった。その後、1905年には河南省政府が河南武備学堂（後の陸軍小学）から50名の学生を日本の「振武学校」に派遣して軍事について学ばせるなど、1908年時点では河南省から日本への留学生は「振武学校」で軍事を学ぶ者以外にも公費留学生76人、自費留学生20人まで増加している（『河南通史』第4巻、p.121）。

1905年に東京で「中国同盟会」が設立されると、翌1906年にかけて早速20人を超える河南留学生が加入し、同盟会河南分会を設立した。こうした時代背景の下、まず、河南籍の留学生が1907年1月に東京で雑誌『豫報』を創刊した。さらに、1907年12月には同盟会河南分会によって革命支持を明確に謳った雑誌『河南』が創刊された。当時は日本にあった中国各地の同郷会、留学生の同人会により『江蘇』、『雲



《河南》

影印本

《河南》杂志于1907年由河南籍旅日留学生创办，也是同盟会河南分会的机关刊物，内容主要反映青年学生、知识分子的爱国热忱与革命思想。

雑誌『河南』の影印本、下は説明文（2023年12月撮影）

南』、『四川』といった雑誌が相次いで創刊され、『河南』もその中の1つに数えられる。残念ながら、『豫報』は翌1908年4月にわずか6号で廃刊となり、一方『河南』のほうも1908年12月に第9号を出したところで、日本政府により廃刊に追い込まれてしまった。いずれも短命であったが、両雑誌創刊の意義は決して小さくないと言われている。

ここで、「鄭州商都遺跡博物院」における特別展に戻ると、そこでは『河南』の影印本が展示されている（写真）とともに、魯迅が日本留学時に「棄医従文」（医学を棄てて文芸に従う）と決めた以降書いた「人間之歴史」（第1号、1907年12月）、「摩羅詩力説」（第2、3号、1908年2、3月）、「科学史教篇」（第5号、1908年6月）、「文化偏至論」（第7号、1908年8月）などの長編論文をこの雑誌『河南』に載せたことと解説されていた（括弧内の掲載号は『魯迅全集』の注釈により補足した）。

一方、『豫報』として展示されていたのは『豫報副刊』である。副刊とは新聞の特別ページのことである。特別展の解説によると魯迅はこの『豫報副刊』に「北京通信」という文章を寄せている。実は、この『豫報』とここまで述べてきた雑誌『豫報』は、名称は同じでも、別物である。こちらの『豫報』は1925年5月4日に河南省の開封で創刊された日刊紙である。魯迅は撰稿人（記者）として当初からこの新聞の創刊に関わっていた。「北京通信」は元の教え子を含む2人の青年あてに北京の現状を知らせる内容となっており、1925年5月14日に掲載された（文章の最後には「五月八日夜」と記されている）。（つづく）

「秦皇島」から「承德」へ

「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(16)

文と写真 吉光 清

数年来、購読している「毎日新聞」には、月に1回「CHINA WATCH」という8ページの新聞が折り込みで入って来る。「第48号(8/22)」の紙面には、ニューデリーで開かれたユネスコ第46回「世界遺産委員会」で「北京中軸線」が「中国の理



「北京中軸線」(CHINA WATCHより)
グラフィック：蘇靖博、李篠甜

想的首都秩序の傑作」
として世界遺産に登録されたことが報じられていた。これは北京市内で8番目の登録になるという。

北京中軸線とは、現在の北京市に南北に連なる15の構成要素を優れた都市計画の成果と認めるもので、北は「鐘樓・鼓樓」から始まって「万寧橋、景山」、そして「故宮」へと続き、更に「端門、天安門」に続き、そこから「外金水橋、天安門広場建築群(門樓、箭樓)」、「正陽門、南段道路遺存、永定門」までの全長7.8キロを言う。途中には「太廟」や「天壇」などの建築物も東西に派生する形で位置付けられている。

こうした壮大なスケール、壮麗なレイアウトの都市計画は、13世紀に成立した「元」が首都として「大都」を建設して以来、歴代王朝が中軸線に沿って、或いは中

軸線を挟んで対称に、寺院や祭壇、行政庁舎を配置したことに拠っている。歴代王朝による歴史的遺産であり、積み重ねられてきた中国の歴史の象徴であり、中国的な価値観の表現であるとも言えそうである。

■今夜の宿はどうなる？

今夜の宿泊予約がキャンセルされたと聞いて愕然としたが、「はい、分かりました」と引き下がる訳にはゆかない。これから自前でホテルの手配をするなど凡そ考えられない、とんでもないことである。

「メールへの返事が無かったからキャンセル!?、旅行に出発した後にメールを受け取れる状態にはなかった!、この予約サイトをこれまで何度も利用しているが、事前の確認メールなど受け取ったことは無いし、『無断で宿泊が無かった場合は全額支払いという“キャンセルポリシー”』にも同意し、クレジットカード情報も提供してあるのに納得できない」と、苦し紛れの英語で食い下がった。

とにかく、宿泊を保証しろと主張して、受付の女性は何処かに電話をして、それから男性従業員を呼び、どこかに案内させる様子だった。男性従業員はスーツケースを持ってくれ、路地を何度も曲がり、数分後に小さな広場に着いた。そこに、上品とは言えない黄色に塗られた、5階建ての建物があった。壁の正面の最上部に大きな「7」の文字、入り口の上には「7天优品酒店」と書かれていた。ビジネスホテルらしかった。

入り口を入った途端、食べ物の匂いがして、食事中らしい家族連れがいた。食事無



案内された近所のビジネスホテル

し条件でチェックインをしたら 349 元だった。四合院に宿泊する夢は儚く破れ、がっかりしたが、とりあえず明日の行動の足掛かりを確保できて、正直ホッとした。

時刻は午後 6 時に近づき、薄闇が迫って来ていたので、何はなくとも食料確保に出た。すぐ、幹線道路らしい大きな通りに出たので、そこに架かる歩道橋の上から、現在位置と方角を確かめようとした。

■歩道橋の上から

対向車線は車が密集し、多くはライトを点灯してこちらに向かって来ている。足元の車線は丁度、車の流れが一時的に途切れたようで空いている。見慣れないのは、3 車線とは別に中央寄りに矢印が示され、U ターン用の車線があることである。

足元の車線の歩道寄りでは、バスが停車し客を乗降させている様子が見える。

遠くに目を凝らして見ると、青地に白の文字で通りの名称が示されていた。「朝陽門内大街」と読める。部屋に戻って、地図を確かめれば、明日の散策で歩き出す方向も決められそうだった。

歩道橋の階段の傍らにある店で買い物をした。カップ麺、黒ビール、おつまみ少々で 20 元だった。

何の飾り気も無い部屋に戻り、簡単に夕食を済ませながら、折り畳み式の 1 枚物の北京市内地図を広げた。今回の旅行では北京を観光するつもりは無かったので、ガイドブックの類は持参していない。

「朝陽門内大街」は東西に走っており、現在地附近から東に向かうと、南北に走る「朝陽門大街」との交差点があり、真っ直ぐに進むと「朝陽門外大街」更には「朝陽路」へと名前を変えながら、道は故宮を中心とする旧市街から遠ざかって行く。



歩道橋の上から見た「朝陽門内大街」の東方向

西に向かうと、「東四」交差点があり、「東四西大街」に替わり、その先で「王府井大街」と交差する。更に直進すれば、「五四大街」を経て、「景山公園」に達する。道が東西南北に走っているので分かり易い。明日は「景山」に登ってから、ブラブラして午後 2 時過ぎには戻って来ようとした。

■「景山」万春亭へ

7 時過ぎに起床し、荷物を纏めて受付に預け、8 時前にザックを背負って宿を出て、昨日の店に寄り、サンドイッチなどを買い込んだ。22 元だった。

「朝陽門内大街」の幅広い歩道を西に向かって歩き始め、すぐ「東四交差点」に着いた。真っ直ぐ進めば「景山公園」だが、古い町並みの風情に惹かれ、左折した。そのまま歩くと「金魚胡同」という通りがあったので、そちらに右折した。周囲の地名は「〇〇胡同」だらけであるが、道幅が広く、立派な通りが続いている。狭い道を通れないかと、左折して「校尉胡同」に入ったが、小路の奥の個人宅に入り込む訳には行かない。間もなく、太い道路に合流して、人々で賑わう交差点に着いた。交差点角の「東来順飯店」の看板には“dong lai shun muslim restaurant”と英語表記がされていた。その向こうに「王府井のランドマーク」と言うべき「北京市百貨大樓」の時計台が少し霞んで見えている。

繁華街には用が無いので、直進して行き止まりを右折して、当初の予定通りの「五四大街」に合流した。道沿いに進み、左側に「神武門」、右側に「景山公園入口」がある場所に着いた。2 時間余りも費やした充分過ぎる漫ろ歩きだった。

「景山公園」に 1 元を払って入園した。「万歳門」を潜って中に入ると、「綺望楼」が目の前にあり、その後ろの頂上にも三層屋根の楼閣が聳えている。

左の道を選び、石段を登るようになったが、ウィークデーにも拘わらず、人が多く、行列の後ろを歩いた。振り返ると、故宮見物を終えた大勢の人々が「神武門」から吐き出されてくるのが見える。汗を拭き拭き、11 時前に山頂にある三層屋根の「万春亭」に着いた。心地よい風は全く無い。(つづく)

●資料：

- ・「CHINA WATCH」チャイナデイリー（北京）
- ・「北京旅游交通図」人民交通出版社股份有限公司、2016

鏡泊湖のお話

訳：一瀬靖子／大槻一枝

——これは、巷に伝わる鏡泊湖¹⁾ 誕生の話です。

昔々、玉帝の誕生日には各地の仙人が、皆で靈宵宝殿に集まり、祝賀の言葉を述べるのが常であった。王母様も大変喜んで、盛大な蟠桃²⁾会を開き、西方の佛老、南方の南極観音、東方の宗恩聖帝、北方の北極玄霊、中央の黄極黄角大仙をはじめ、二十四の洞窟から仙人を呼び、各宮殿からは大小の神々を招いた。多くの仙女も招待された。

神々が招かれて仙境の瑤池に行くと、宝閣には香が焚かれ、瑞雲に覆われ、喜びに満ち溢れていた。テーブルには山海の珍味が、ところ狭しと並べられ、珍しい果物や色とりどりの酒が、きらびやかにその場を飾り立てている。

宴が終わると、仙人たちはそれぞれの洞窟に帰って行ったが、余韻冷めやらぬ王母様は、仙女たちを引き留めて、再び金のテーブルを整え酒杯を重ねた。お色直しをした艶やかな姿で、長い袖を振りながら舞う数知れぬ仙女たち。芳香は天の川に満ち満ちていた。長い帯のような滝が天の川から天空を突いて流れ出し、山々を囲む牡丹江へと流れ、青瓦のように煌めく大きな湖となった。

宴の数日後、王母様は髪を整えようと紫檀の鏡台に近づいたが、“平波宝鏡”が見当たらない。宮殿の中をあちこち探したが見つからず、王母様はいらだって雷神・電母に、下界に下りて鏡を探すように命じた。雷神は掌に雷を載せ、電母は手に稲妻を持って、ゴロゴロ、ピカピカと天空を駆けまわった。河川、湖や名山を探し回り、寧温托³⁾の上空まで来ると、電母の閃光に照らし出されて、広い湖水に咲き誇る大きな牡丹の花が浮き上がった。その花は、周囲を囲む山々がこれを支える葉となり、四つの小島が花粉をいっぱいを含んだ雄蕊になっている。花卉の間の露が一滴また一滴と滝になって水中に落ち、集まって大きな輝く湖を形作って

いる。花の中心部の静かな湖水の底に、異彩を放つ宝鏡が静かに置かれていた。雷神と電母はやっと王母様の“平波宝鏡”を探し出したのだ。

この宝鏡はどうしてこんな所まで、来ることになったのだろうか？ 実は蟠桃会で酒に酔った仙女の一人が、手を滑らせて“平波宝鏡”を盥の中に落としてしまったのだ。それを別の仙女が盥の水と一緒に天の川に流したのが原因であった。鏡は滝のような水の流れに流され、大湖へと運ばれた。鏡が湖水に落ちると湖面は全く静かになり、強い風が吹いても波風は立たなくなった。湖水はいつ見ても透明で静かであり、トンボが戯れ、蝶々やミツバチが湖上に飛び交った。夏も冬も、いつも美しい春のような光に溢れていた。

王母様は鏡が見つかったと聞いて喜び、天女を従えて大湖へ足を運んだ。目を凝らして見ると、確かに大切な鏡が湖底に沈んでいる。王母は青く澄んだ湖の水に魅かれ、この界隈の一木一草すべてに愛情を感じた。感情豊かな仙女の一人が口走った、「人間世界は仙界より良いところだ。仙界は人間世界に劣っている。私はやはり下界に戻り、そして、ここに住みたい」。

王母様がこれを聞き、急いでたしなめた。「冗談



「鏡泊湖」岸のリゾート施設(ウイキペディアより)

を言うてはいけません。もし、お前が本当に此処の景色を美しいと思うなら、宝の鏡をここに沈めたままにして、波風が立たない天外の花園とすればよいでしょう」と言い、それと同時に『鏡泊湖』という名称を提案した。

仙女たちはこれを聞き、「鏡の沈む、鏡のように波静かな湖とは良い名ですね」と喜んだ。

この後、王母様は仙女たちの願いを聞いて、毎年旧暦六月十五日の晩に、鏡泊湖に映る明るい月光の下で水浴びをすることにした。

王母様は、いたずらな妖魔が来て“平波宝鏡”を盗み出し、大湖の安寧を乱すことを恐れ、平安を保つために大神を守り神として派遣し、末長く宝鏡と大湖を守ろうと考えた。しかし適当な守り神が見つからない。

王母様は老いた椴樹（ムクゲ）に尋ねた、「椴樹よ、貴方は一番の長寿者だ。高い徳を持ち、人々の期待も大きい。それでお願いしたいのですが、大湖の宝の鏡を見守って頂けないでしょうか?」。老いた椴樹は体をゆすらせると、細い声でゆっくり答えた、「駄目ですよ。私には力がない。黒山に尋ねてみてください」。

そこで、王母様は仙人たちを引き連れて黒山に登り尋ねた、「黒山よ、貴方は高いところにいる、肝は座り、心は細やかな方だと人々は言っています。私たちの“平波宝鏡”を見守ってくれませんか?」。黒山は体を揺すり、閉じた目を静かに開くと、真っ白な髭をなでながら答えた、「王母様のお願いとあれば協力しましょう。夜ごと日ごとにお守りし、怠りません!」。

これが鏡泊湖岸にある「黒山」である。「大黒山」とも言う。黒山は夏も冬も湖の傍から鏡泊湖を見つめ、宝の鏡を見守っている。黒山という名も王母様によって名付けられたという。



観光用に造られた「平波宝鏡」
(ウイキペディアより)

この地方では“黒山老人”という言葉があり、“職分を忠実に守る者”という意味になるそうである。黒山が忠実に宝鏡を見守っていることの証である。

王母様が“平波宝鏡”の見守りを黒山に依頼した後、鏡泊湖では大黒魚という魚を見かけるようになった。この大黒魚はよく飛び跳ね、静かな鏡泊湖は騒々しくなった。大黒山の主がこれを知って魚を捕り、鏡泊湖の石の隙間に封

じ込めた。今に至るまで鏡泊湖の湖底には“大頭魚”という瘦せ型で、頭は金槌の形をし、四本の髭を持った目の無い魚がいるという。鶏に食べさせる他にあまり用途は無いとのこと。石窟の洞穴に住み、陽の目も見ずに暮らしている。静かな大湖を騒がせた罰かもしれない。(おわり)

収集・整理：陳曉飛

■原注

- 1) 鏡泊湖：黒竜江省の南に位置する牡丹江市の南西にある湖。観光地でもある。
- 2) 蟠桃(ばんとう)：蟠桃は平たい形の桃、座禅桃ともいわれる。西王母が育てている桃で、古代神話では3千年に一度だけ実をつける桃といわれている。
- 3) 寧温托：現在は、寧古塔あるいは寧古台と呼ばれている。鏡泊湖付近の古城。

■訳者補足

鏡泊湖は、およそ1万年前の火山噴火によって牡丹江がせき止められて形成された堰止湖。面積は90.3平方キロ米で、琵琶湖のおよそ7分の1。一番深い部分で水深60メートルほどになっている。湖の出口近くに「吊水楼瀑布」があり、水の多い時期は幅200メートルにもなる。

2006年、世界ジオパークに指定され、2011年には中国の5A級観光地として認定された。夏には避暑地としても広く利用されている。(ウイキペディアより)

中国人の友人によると、観光ガイドたちは「湖の向こうに見える山は毛沢東が横になって寝ているように見えます」と言うそうだが、それが「黒山」かどうかは不明である。

「旧字・難字」は無意味

和田 宏

今日は、大した話ではありませんが、漢字ブームと言うか、難しい漢字が増え過ぎていることについて、私見を述べたいと思います。

私の友人の「広沢」君は、北沢中学校時代は「広沢」と書いていたのが、50歳を過ぎたら、「廣澤」と書いて来るようになりました。「齊藤」さんが「齊藤」に、「浜田」が「濱田」や「濱田」に、「渡辺」が「渡邊」や「渡邊」に。「徳江」さんも、正式には一が増えて「徳江」と書くんだよと、言って来ました。「真下」さんが「眞下」さんに、「恵子」さんが「恵子」に。漢字をわざわざ戦前の古い旧字で書いている訳です。また、「高」（＝高）とか、「崎」「嵯」（＝崎）とか、「嶋」（＝島）とか書いたりするのも流行っているようです。

これは俗字というか異体字です。日本では、多数で複雑な漢字の不便さを避けるため、1981年10月に常用漢字として1945字を選定しました。常用漢字でない「薔薇」や「檸檬」という漢字を書いてみせるような、つまらん教養をひけらかさんでええよ。（笑い）

さて、お隣の大陸中国では、今は「簡体字」が正字です。簡体字が、『漢字簡化方案』として国務院より公布された1956年から一般でも使用されるようになりました。方言だらけの中国語を1982年に中華人民共和国の憲法で、「国家は全国で通用する普通話を推し広める」ことや発音の「拼音」も規定されました。北京や哈尔滨で話されていた発音が採用されました。4000年の歴史を持つ漢字を革命的に簡潔にした中国共産党政府の英断を、小学生から漢字を勉強させられて来て、うんざりしていた私は、大歓迎した次第です。その例が、習→习、飛→飞、箇・個→个、涙→泪、議→议、陽→阳、龜→龟、塵→尘、鬪→斗などです。

中でも秀逸なのが、簡体字の「丰」です。元の繁体字の「豐」は、稲穂が台付きの皿に盛られている様子を表した象形文字ですが、皿の中の稲穂1本

を取り出した「丰」だけで、その“豊かさ”は、いかに表現されています。

ある小学校で“今日から「豊」は「丰」と書くことになりました”と、先生が話しながら黒板書きした途端、子ども達から大歓声が上がった場面に、たまたま授業参観に来ていた周恩来が遭遇しました。10万字ある漢字を知っている必要はなく、3000字知っていれば充分なんです。

一方で、①毛沢東（日本）②毛澤東（台湾）③毛泽东（中国）と3種類の書き方になっている現状は、ちょっと残念です。

3国の国語学者が協議すれば良いと、私は思うのですが。この簡体字の毛泽东を、3国とも採用すれば、便利で宜しいと考えます。

1949年、新中国の成立当時は、国民6億人の非識字率（文盲）は80%だったそうで、1956年の「簡体字」の採用のお陰で非識字率がぐんと下がりました。また、これによって、人名である「孫」を「孙」に、「劉」を「刘」と、「鄧」を「邓」、「畢」を「毕」と書くことになる訳ですが、こう書いたからと言って中国人の友達は、自分の名前を軽んじられたなどと思わないと話してくれました。

表記方法では、日本語は、縦書き・横書きの両方が出来る点も優れた言語と言えますが、今の中国では、古典など一部を除いて、今は全ての文書は横書きです。右手に筆を持ち、左右についた両目で字を追いながら、横書きで左から右へ、上から下へ書くのが一番、理にかなっています。仮に墨汁に浸した筆で書いたとしても書いたばかりの字に手が触れないので、こすれて汚れることはありません。

日本では、旧体字や異体字を使うのは、戸籍上はこうなっているからなどと、使う人のアイデンティティーや、“験を担ぐ”などの理由があるのでしょうか、私は、こういう思考を良いとは思いません。漢字は、その意味が判り、識別出来れば良い

訳で、表記は易しければ易しいに越したことはありません。使い易いように漢字を制限し、簡略化した戦後民主主義の知恵と努力に、私は大賛成であり、旧体字や異体字を使うのは、時計の針を反対に回す愚挙です。背景には、パソコンやスマホの発達で機械が自動的に変換してくれるので、難しい字が書けているに過ぎません。しかも、スマホなどの所為で若者の使う日本語の表現力は痩せ衰えて来ているように、私には感じられます。

懐古趣味の「旧体字」にこだわったり、妙な異体字を使用したりすることが、日本語の表現を豊かにすることではありません。同じ漢字を、難しく古い方が書けたからと言っても少しも偉い事ではありません。同じ漢字なのに、表記が数種類あるというのも、煩雑です。漢字検定などが、もてはやされたりしていますが、漢字をわざわざ難しく書いたり、難しい漢字が読めたりすることを得意がらず、統一されたやさしい漢字を使い、平仮名、カタカナまじりで表記する日本語の素晴らしさを生かす方が、ずっと良いと私は考えます。

ところで、日本人は、中国から伝わった漢字を使っていますが、文字が同じでも中国語と日本語では意味が違うものがあるので注意しましょう。例えば、「手紙」は、中国語では“トイレットペーパー”の意味です。「切手を下さい」と言うつもりで、「給我切手」と言って手を出せば、文字通り、手を切られてしまいますよ（笑い）。中国語では「邮票」と言います。「手袋」は、中国語では“ハンドバッグ”のこと。日本語の「犬」は中国語で“狗”といいます。そう言えば、「あいつは権力者の犬だ。」と言う意味で「走狗」と言いますね。日本語の「麻雀」は中国語では“雀（すずめ）”のことで、マーじゃんは“麻將”と記します。でも麻雀牌を混ぜる時に、ジャラジャラと音がするのが、大群の雀の鳴き声に聞こえますね（笑い）。中国語の「酒店」は、“ホテル”のこと。「走」は走るではなく、“歩く”を意味します。「走路」で道を歩くです。「去」は、去るではなく“行く”。「床」は“ベッド”の意味です。中国には畳がありませんので、畳の上に布団を敷くようなことはなく欧米人と同じようにベッドの上で寝ます。「勉強」は中国語では“無理や

りする”とか、“いやいやだけどする”という意味になります。確かに勉強はいやいやしましたね（我勉強学习 wǒ miǎn qiǎng xué xí）。店員が店頭で『そこ行くお兄さんー！勉強しておくよー！』と言えば、商品の定価を値引きするよー！の意味です（笑い）。

さて、私は、柳原白蓮（本名：宮崎燐子）さんが創設した短歌結社『ことたま』に入っていましたので、彼女が1963年に行なった講話の録音CDを持っていますが、この中で白蓮さんは、“言葉ほど大事なものは無い。言葉で人を殺すことも出来るし、逆に人を幸せな気持ちにもすることも出来る。言葉には魂がある。”と話し、その例として、「ある使用人の男が、雇い主の西洋人の家で用事を言いつけられた際、男は自分の名前が『旦那』であると教えたところ、日本語のよく判らない西洋人は、『早くしなさい。旦那ー！旦那ー！』と大きい声で叫ぶので、言い付けられた辛い仕事もグッと耐えて行ない、最後は気持ち良くなるという話」です。やや滑稽な感じがするけれど、言葉の持つ役割の核心を突いているのではないのでしょうか。

これとは逆に、最近では斎藤元彦兵庫県知事の偉そうな発言から西播磨県民局長が自殺してしまう事件まで起きています。「俺は知事だぞ」というパワハラ的一种ですがね。

西暦663年の「白村江の戦い」で、百済・日本の連合軍が新羅・唐の連合軍に敗れて、日本は朝鮮半島から撤退。3歳の山上憶良が、百済の滅亡に際して父親と共に日本に渡来しました。晩年の山上憶良が遣唐使の無事な帰国を祈って作った長歌「好去好来歌一首反歌二首」の中に、万葉仮名で“神代欲理 云傳久良久 虚見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉國 言靈能 佐吉播布國等 加多利繼 伊比都賀比計理・・・（神代より言ひ伝て来らくそらみつ大和の国は皇神（すめがみ）の厳しき国 言靈（ことたま）の幸はふ国と語り継ぎ言ひ継がひけり・・・）”というのがあり、白蓮さんが名付けた『ことたま』と言う短歌会の名称も領けます。講演をした当時77歳の白蓮さんの明瞭な声に私は深く感銘を受けたのであります。（完）

2桁同士の掛け算を暗算で求める早業 (4) 河野公雄

今回は、2つの2桁の数の十位の数に8や9のような大きい数字の掛け算に適した計算法を紹介します。こんな方法があるのかと驚かれるのではないかと思います。

■パターン6

$$9? \times 9?$$

《?》は、1から9までの任意の数

十位の数にどちらも9、一位の数は何でもいいです。例えば、 97×98 の暗算、頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



3、2 (さん・に)
 $3+2=5$ 、95
 (さん・に、ご、きゅうじゅうご)
 $3 \times 2=6$ (さん・にがろく)
 9506

最初の3、2は、 $100-97$ と $100-98$ から出したものです。後は、この3と2を使って計算すればOKです。まず、3と2を足し合わせて5、100からこの5を引いた95が上二桁の数字になります。次に、3と2を掛け合わせた6が下二桁の数字になります。6は一桁の数なので06とします。95に06を続けた9506が答えになります。

次は、 93×98 です。



7、2 (なな・に)
 $7+2=9$ 、91 (なな・に、く、きゅうじゅういち)
 $7 \times 2=14$ (しち・に、じゅうし) 9114

$100-93$ と $100-98$ から7と2を出します。後は、この7と2を使って計算します。まず、7と2を足し合わせて9、100からこの9を引いた91が上二桁の数字になります。次に、7と2を掛け合わせた14

が下二桁の数字になります。91に14を続けた9114が答えになります。

もう一つやってみましょう。 91×93 です。



9、7 (きゅう・なな)
 $9+7=16$ 、84 (きゅう・なな、じゅうろく、はちじゅうよん)
 $9 \times 7=63$ (く・しち、ろくじゅうさん) 8463

$100-91$ と $100-93$ から9と7を出します。後は、この9と7を使って計算します。まず、9と7を足し合わせて16、100からこの16を引いた84が上二桁の数字になります。次に、9と7を掛け合わせた63が下二桁の数字になります。84に63を続けた8463が答えになります。

91×91 から、 99×99 までの計算結果は以下の表のようになります。

	91	92	93	94	95	96	97	98	99
91	8281	8372	8463	8554	8645	8736	8827	8918	9009
92		8464	8556	8648	8740	8832	8924	9016	9108
93			8649	8742	8835	8928	9021	9114	9207
94				8836	8930	9024	9118	9212	9306
95					9025	9120	9215	9310	9405
96						9216	9312	9408	9504
97							9409	9506	9603
98								9604	9702
99									9801

パターン6の計算法を基本にして、適用範囲を広げていきましょう。前回紹介したパターン5と同じように2つの発展形があります。1つ目の発展形は、80台と90台、70台と90台のように、一方の数が必ず90台である形です。2つ目の発展形は、80台と80台、70台と70台のように、十位の数と同じである形です。

■パターン6の発展形(1)

例えば、80台と90台の掛け算として、 82×96 をやってみましょう。頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



18、4
 (じゅうはち、よん)
 $18+4=22$ 、78 (じゅうはち・よんにじゅうに、ななじゅうはち)
 $18\times 4=72$ (じゅうはち・よんななじゅうに) 7872
 $6\times 7=42$ (ろく・しち)

パターン 6 と変わったところは、一桁同士の足し算・掛け算で済んでいたのが、一桁と二桁の足し算・掛け算が必要になってきました。少し面倒になりますが、手法は全く同じです。まず、 $100-82$ と $100-96$ から 18 と 4 を記憶します。 $18+4=22$ 、 $100-22=78$ で上二桁が 78 になります。 $18\times 4=72$ で下二桁が 72 になります。78 に 72 を続けて 7872 が答えになります。

次は、70 台と 90 台の掛け算です。 72×91 をやってみましょう。



28、9
 (にじゅうはち、く)
 $28+9=37$ 、63 (にじゅうはち・く、さんじゅうしち、ろくじゅうさん)
 $28\times 9=252$ (にじゅうはち・く、にひゃくごじゅうに)
 6552

パターン 6 と変わったところは、下二桁の数を求めるための 28×9 の答えが 3 桁の 252 になっていることです。そのため、百位の 2 を上二桁の 63 に繰り上げて 6552 とします。

■パターン 6 の発展形(2)

パターン 6 の 2 つ目の発展形は、80 台同士、70 台同士などの掛け算です。

それでは、80 台同士の計算の一例として、 82×87 をやってみましょう。頭の中では、以下のように数字



18、13
 (じゅうはち、じゅうさん)
 $18+13=31$ 、69 (さんじゅういち、ろくじゅうく)
 $18\times 13=234$ (じゅうはち・じゅうさん、にひゃくさんじゅうよん)
 7134

を思い浮かべています。

パターン 6 の場合は、一桁同士の足し算・掛け算で答えを出すことができましたが、発展形(2)の 80 台同士の掛け算では、10 台同士の足し算・掛け算が必要になります。ですから、パターン 5 の 10 台同士の掛け算をマスターしておかねばなりません。また、下二桁の数を求めるための 18×13 の答えが 3 桁の 234 になります。そのため、百位の 2 を上二桁の 69 に繰り上げて 7134 とします。

70 台同士の掛け算では、20 台同士の足し算・掛け算をする必要があります。20 台同士の掛け算については、パターン 5 の発展形(2)でやりましたが、どうしても手順が複雑という感じがしますね。

このように、パターン 6 で紹介した計算法は、十位の数が 9 である 2 つの数の掛け算には適していますが、それ以外ではあまり有効ではありません。それではどうするかですが、それは次回に。

4 回にわたって、6 つのパターンについて紹介してきました。ちょっと確認をしておきましょう。

パターン 1: 《?? \times 11》例: 49×11 など

パターン 2: 《?? \times 99》例: 63×99 など

パターン 3: 《十位の数が同じ、一位の数が足して 10》例: 34×36 など

パターン 4: 《十位の数が足して 10、一位の数が同じ》例: 27×87 など

パターン 5: 《1? \times 1?》例: 14×19 など

パターン 6: 《9? \times 9?》例: 93×98 など

ユーチューブ動画に上がっている「インド式計算法」は、だいたい上の 6 つのパターンが多いです。小学校で習う筆算とは異なり、速く・簡単に・暗算でできるようになります。ぜひ、皆さんのお孫さんに教えてあげてください。

2 桁同士の掛け算は、 11×11 から 99×99 まで全部で 3,321 通りあります。それに対し、6 つのパターンに含まれるものは 310 通りです。それじゃ、残りの 3,011 通りはどうすればいいの? となりますよね。そこで、今回は、3,321 通りの組合せに使える方法を紹介します。(つづく)

●参考: 高橋清一著、ニヤンタ・デシュパンデ監修、「脳をきたえる インド数学ドリル 入門」、日東書院本社、ほか

8/3～8/11に開催された「東京藝術大学と中国人留学生～李叔同から現代～展」を観た。会場となった陳列館は大学正門を入ってすぐ左手にあり、歴史を感じさせる、こぢんまりした建物だった。1階と2階が展示スペースになっていた。

「李叔同」の名前は、これまで見たことも聞いたことも無かった。1階の入り口を入ってすぐ右手のスペースに、その「李叔同」だけのコーナーが設けられていた。薄い口髭を生やした、卒業制作の自画像は、沈んだ色調で落ち着いた雰囲気、物静かで思索的な表情は、物悲しい表情にも見える。

展示会の趣旨を読むと、「芸術資源活用プロジェクト」が『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料』の趣旨を継承し、発展させように行った活動の中で、「旧東京美術学校」と「旧東京音楽学校」の記録文書、関連資料を調査・整理した成果を発表するというこ

とであった。「東京藝術大学」として1949年に再出発して75年目を迎えた、今年度における記念碑的な意味があることは当然であろう。

日本美術の継承、再興を目指して1889年に開校された、「東京美術学校」に「西洋画科」が設置されたのは1896（明治29）年で初代教授は黒田清輝（後に子爵）であった。

1年半に亘る調査の成果として作成された、中国人留学生に関する歴史年表を見ると、中国人留学生が「西洋画科撰科」に最初に合格・入学したのは1905年のことであり、1906年に入学し、1911年に最初の卒業生となったのが「李叔同」と「曾延年（帰国後、劇作家）」の二人だった。「東京美術学校」開校後15年であり、前年の卒業生に藤田嗣治がいた。

入り口から直進した広い展示室内には、東京美術学校時代の中国人卒業生33名の自画像が展示されていた。西洋画科では1898年から自画像の卒業制作

が始まり、1902年からは学校が買い上げる制度になっていた。室内に入ると視線を一齐に浴びるような心地がした。各卒業生についての説明書きには、職業や勤務先などが記されていた。そこから、留学生たちが帰国後に様々な分野で活躍し、果たした貢献を看

ることが出来た。
東京美術学校は東京音楽学校と異なり、共学ではなく、男子校として開校された筈で、自画像は全員男性と思いついて観ていたが、「熊汝梅」の自画像は女性と言われても違和感が無かった。2階の展示室には昨年度の卒業生たちの卒業制作（絵画だけでなく）の作品が展示されていた。

再び「李叔同」のコーナーに戻り、詳しく記された個人年表を見た。黒田清輝が主宰した「白馬会」に1909～1910年に出品し、油絵4点が入選していた。在学中に自分たちで立ち上げた劇団公演で女装し、女性の役を演じた。1911年

に帰国し（31歳）、「天津高等工業学堂」の図案教員となった（同年、辛亥革命が勃発し、翌年早々に清国は滅亡）。翌春、上海の女子学校の音楽教員となり、秋には、浙江省の師範学校（現大学）で図画と音楽の教員となった。其処での数年間に、「中国初の授業での裸体モデル使用」、「中国初の石膏デッサンの導入」、「『旅愁』の中国語歌詞による楽曲の普及」など、留学経験を踏まえた、多領域での芸術的才能の高さと、先進性を示す業績を残していた。

しかし、何としたことか！38歳で彼は教職を辞めて出家し、62歳で没するまで全ての創作活動から離れたようで、作品の殆ども破棄された結果、中国国内を含め、現存する絵画は、この自画像と、他には1点のみだという。どのような経緯と心情で、そうした決断に至ったのだろうか？知る術は無く、複雑な思いで自画像を見ていると、その表情は「モナリザの微笑」のように見えて来た。



陳列館の扉に貼られた展示会のポスター



壁一面に展示された卒業制作の自画像

私の心に残る旅①－「恩施市」

樊 婷婷 (fán tíng tíng)

今月号から、樊婷婷さんの「私の心に残る旅」を連載いたします。上海出身で中国語教師の樊さんは、先月末わんりいに入会された新会員です。旅がお好きで中国はもとより世界各地を旅した心に残る思い出を、最新情報も織り込みながら書き綴っていただきます。どうぞお楽しみに！！

~~~~~

今から6年前(2018年)の春、上海に住む姉妹と一緒に中国では大人気の「恩施大峡谷」へ旅行に行ってきました。

「恩施大峡谷」は中国湖北省の南西部にある恩施市に位置し、市内から約50kmの所にあります。これは2004年に発見され、政府の投資で整備され、今、国家地質公園となり、AAAAA(5A級)の景観区となりました。峡谷は全長108キロ(およそ東京から熱海までの距離です)、面積300平方キロ(神奈川県より50平方キロ広い面積です)に及びます。絶壁が続く「画廊」と飛瀑、そびえ立つ連峰、深山幽谷、この雄大な自然の地形が創り出した「奇景」は、アメリカのグランドキャニオンと優劣つけがたい景観だと言われています。峡谷のほかに、大自然の雄大さを満喫できる絶景の観光スポットもたくさんあります。



梭布垭石林(百度百科から)

一方、恩施は土家(トゥチャ)族自治州で、土家族以外にも、苗(ミャオ)族、侗(トン)族など、中国の56民族の内29の民族が住んでいて、少数民族の人口だけで恩施の人口の50%以上を占めています。少数民族の伝統が完全に保存されている町なので、大自然と少数民族の文化がたっぷり味わえる神秘的なところですよ。

私たちは「恩施4泊5日」のツアーに参加して、初日は17時14分上海駅発の寝台列車に乗って一泊を過ごしました。久しぶりに上海の家族と一緒に列車に乗り、わくわくして、話に花が咲きとても楽しかったです。グリーン車なので快適でした。翌朝9時21分に恩施駅に着き、現地のガイドさんに迎えられました。30歳前後の浅黒いがっちりした男性です。参加者は中国各地から来た人たちで約40名でした。ガイドの話によりますと、2004年まではこの地域は非常に貧しくて、若者はみな都市部に出稼ぎに行きましたが、今はみんな戻ってきて観光業の仕事に携わり、生活も豊かになりました。ガイドさんもその中の一人だそうです。

着いた日、恩施市から約54キロ離れた所にある「梭布垭(スオブーヤー)石林」に行きました。これは中国で第2位の広大な石林で、4.6億年前のオ



恩施大峡谷の「百里絶壁栈道」(百度百科から)





「女兒会」の開催街、湖北省・恩施市(2018年5月、筆者撮影)

ルドビス紀に形成されたと言われます。巨大な石が林のように密集して立ち、石林の自然生態の千姿万態が目の前に広がっています。「梭布垭」とは、土家族の言葉で「3つの峰と峰の間の道」という意味です。石林にはたくさんの見どころがありますが、中でも青龍寺、蓮花寨、磨子溝、九龍壩の4カ所は「4大景区」と呼ばれ、特に観光客に人気があります。訪れた日はあいにく大雨で、青龍寺と蓮花寨の2カ所だけ行きました。険しく滑り易い岩道で怖くて大変でした。途中、現地のおじさんが売っているゴム製の靴カバーを買って履きました。とても丈夫で滑り止め効果抜群で助かりました。因みに第1位の石林は、雲南省石林イ族自治州にあります。

夜、ホテルの近くの屋台で当地の腊肉(燻製肉)などの名物料理を食べました。私が特に美味しいと思ったのは新鮮なキャベツで、柔らかくて甘かったです。また、採りたてのトウモロコシの味もなかなか忘れられません。

## ■土家族の風習

### ・土家族女兒会(土家族バレンタイン)

毎年旧暦の7月7日から12日の間、土家族の伝統的な「女兒会」が開催され、土家族の情人節(バレンタイン)とも呼ばれています。

その時、若い娘さんたちは盛装で、自分の一番

綺麗な洋服を着て、自家産のトウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモなどを入れた籠を背負って開催地の街に行って、街の両側に農産物を置いて、自分は籠の上に坐り、好きなタイプの男性が買いに来るのを待ちます。

一方、若い男性たちは籠を肩にかけて街をぶらぶらして、気に入った女性の前に立ち止まって売り物の値段を聞いたりします。もし両方とも気が合えば、街の外れの山に行って、二人は歌の形でお互いの家庭の状況や気持などを聞いたり交流したりして、結婚の相手にするかどうかを決めるそうです。

### ・哭嫁(泣いて嫁に行く)

土家族の新婦は家族と別れる悲しみや結婚後の幸せのため、結婚式の1カ月前から泣き続ける風習があります。

結婚前に涙を全部流してしまえば、結婚後はもう涙がないから幸せになると思っているのです。この1カ月は、まず、お母さんが生んでくれた恩や別れの悲しみのために泣きます。次は、お父さんが一生懸命に働いて育ててくれたことに感謝して泣き、それから兄弟のこと、友達のこと、最後に飼っている牛や豚、犬と別れる寂しさのために泣きます。また、結婚式の当日、泣きながら惜別の歌を歌って、実家から嫁に行きます。

ちなみに、お葬式の時には、誰も泣くことなく、みんなで笑って亡くなった人を天国に送ります。その方が亡くなった人は幸せに天国に行けるからだそうです。(つづく)

■注:「土家女兒城」は2013年完成の中国で8か所目の古い町並みを再現したテーマパーク。エキゾチックなムードが漂い、グルメや娯楽、ウォーターパークが一体となっており、ネット上で大人気の観光地となっている。(「人民網日本語版」ほか)

## 第 214 話 聖人

腹ペコな乞食が街へやって来て、「私は神のお告げを伝える聖人だ」と言いふらしたので、捉えられて、役人の前に引き出された。

役人は訊いた「お前は本当に聖人なのか？」

乞食：「はい、間違いございません。お役人様」

役人：「若しそうなら、ここで神様のお告げをいってみろ」

乞食：「お告げは沢山あるが、今は腹ペコで、伝える力が出ない」

役人は、直ぐに食事を用意させて、乞食が満腹になるのを待って訊いた「それで、神様は結局、何と仰るのだ？」

乞食：「神様は、私が今晚、食事をさせてくれる親切なお役人に会うだろうとおっしゃったのだ」

## 第 215 話 賄い食の合意書

昔、ケチな大臣がいて、彼は、息子のために家庭教師を雇うことにした。募集広告の中に彼は書いた「我が家は粗食である」

一人の教師が門口に現れて：「私はお宅で家庭教師がしたい」

大臣：「先生は私が出した広告をご覧になりましたか？ 我が家では、あまりよい食事は出せませんが」

先生：「勿論、結構ですよ」

大臣：「それでは、後で面倒が起きないように、合意書を作成しましょう。」

先生は書いた「没有鸡鸭也行，没有鱼肉也行（鶏や鴨が無くてよい、魚や肉が無くてよい）」それを見て大臣は大変満足し、書面に署名した。

初めての食事の時、先生は怒って言った「何故野菜だけで、肉や魚がないのだ！」

大臣は「何を言っているのだ！ これは合意書にちゃんと書いてあるではないか」

先生：「じゃ、その合意書を出して、ちょっと読んで見ようではないか！」

先生は合意書を取り出すと、大きな声で読みだした「没有鸡，鸭也行，没有鱼，肉也行（鶏がなければ鴨でも良い、魚がなければ、肉でも良い）」

大臣は驚いたが、仕方なく、先生の食事に肉料理を追加した。

## 第 216 話 香りと音

旅人が、ある小さな村に差しかかり、ホテルがあったのでちょっと入ってみたが、すぐ外に出ようとした時、主人が声をかけて来た「お客様、お待ちください。お支払いがまだです！」

旅人は怪訝そうに言った「何か誤解しているんじゃないか。私はここで食事などしていないが」

すると、主人は言った「いえ、食事代の請求ではありません。あなたはここに来て、料理の匂いを嗅いだでしょう？ その香りの代金を頂きます」

旅人は思いました。世の中にこんな馬鹿な話があるものか。この主人は金の亡者に違いない。こんな奴に、ものの道理を話しても仕方がない。そこで直ぐに言った「分かりました、払います」

そう言いながら、彼はポケットから小銭入れをとり出し、主人に見せた。

主人は喜んで手を出したが、旅人は小銭入れを主人の顔の前で振って、じゃらじゃらいう音を聞かせただけで、又ポケットにしまってしまった。

主人は怒って「どうして払ってくれないのだ！」と怒りました。

すると、旅人は、落ち着き払って言った「私は、料理を食べないで、匂いの分を払うのだから、あんたも小銭の音を聞くだけで十分だろう」

真香





## ★北原白秋の句碑 寺西 俊英

9月号(296号)に和田さんの北原白秋の随筆が載っていた。その中に白秋は、1931年(昭和6年)から1940年の9年間世田谷の砧村に住んでいた、と書かれている。その時期のいつ頃かは定かでないが、川崎市麻生区にある「王禅寺」を訪れていてその時詠んだ禅寺丸柿の句碑が境内にあるという。この王禅寺から約3キロのところに「高蔵寺」という花の寺がある。私の住んでいる緑山からほど近い三輪町にこの寺はある。少し横道にそれるが、三輪町はその昔奈良県にある大神神社(おおみわじんじゃ)のあたりに住んでいた人々がこの地に移り、三輪町を造ったとの言い伝えがある、由緒ある地だそうだ。

さて、石楠花で有名な高蔵寺は、花が咲く時期には多くの人を訪れる。ところが、2年前の2022年正月3日に火災に遭遇し本堂が全焼した。このお寺には、白秋の歌碑がありお参りに行くたびに見たものである。歌碑の傍の案内の石碑によると、彼は昭和10年の10月に高蔵寺を訪れ七首の禅寺丸柿の歌を詠んでいる。(写真参照)ここに一首紹介すると、

「高蔵寺 しづかやと散葉 眺めいて

梢の柿の つやつやしいろ」

火災後2年半あまり経ち、ようやく再建に取り組み始めたが、木の囲いがしてあって、中には土曜日と日曜日しか入れないので、ある日曜日に写真を撮った。歌碑の傍に白秋を紹介する石碑がある。

「歌人、北原白秋は昭和十年十月の秋、高蔵寺を訪れて柿の美しさを探勝し、七首詠んだ晩年の歌です。この歌には静寂な秋の風景と、境内の穏やかな風情を感じ取ることができます。この時代は本堂と庫裡が茅葺きで、山内には柿の木が数十本古木の太木で生い茂り、周辺の住民も柿を中心とした生活を営み、寺と住民とが一つになって息づいていた頃の時代です。白秋はその後、視力を失い昭和十七年十一月二日永眠されました。享年57歳」



## ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

この道や  
行くひとなしに  
秋の暮れ

松尾芭蕉

qiū shēn mù sè wǎn  
秋 深 暮 色 晚  
xiǎo jìng jì wú rén  
小 径 寂 无 人

## 【わんりいの催し】

### \*\* 薬膳講習会 \*\*

#### 夏の疲れを取る秋の薬膳料理講習会

- 会場：川崎市麻生市民館 調理室
- 日時：10月14日（日）10：00～16：00
- 講師：趙 迪（河南省出身）
- 会費：2,000円
- 申込：10月7日までに 代表・寺西まで

漢方のお話を聴きながら、季節に相応しい薬膳料理を教えてくださいましょう！

~~~~~

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：玉川学園コミュニティーC多目的室3
- 日時：10月29日（火）10：00～11：30
11月5日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

### \*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：町田フォーラム 学習室3・4
- 日時：10月20日（日）
- 講師：植田渥雄先生 桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)

#### ■10月・11月定例会 代表宅

- ▼10月3日（木）13：45～
- ▼11月7日（木）13：45～

#### ■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼11月号 10月31日（木）
- ▼12月号 未定

## ☆☆編集後記☆☆

唐代の詩人・劉希夷の「代悲白頭翁」という詩に、「年々歳歳花相似たり・歳歳年々人同じからず」という有名な一節がありますね。「人間社会の構成員は毎年、歳をとって変わるけれど、花木や自然は毎年変わらない」という意味で、人生の移ろいやすさを、毎年確実に巡って来る自然と対比させて詠っています。

しかし最近の自然は、毎年同じようにはやって来ません。気象上の平年値は、過去30年の平均値を指し、10年毎に更新されるのだそうですが、今年の気温や雨量などは平年値と比べると、驚くべき差です。近年は、著しい変化をしているということで、何時、人間生存の限界が来るのか、心配になってしまいます。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい
10月以降の入会は、当年度会費1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 297号の主な目次

寺子屋 四字成語(76)『開天辟地』……………	2
「中原雑感」(45) 『豫報』・『河南』という名の雑誌 ……	3
「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(16)……………	5
民話『鏡泊湖のお話』……………	7
「旧字・難字」は無意味……………	9
2桁同士の掛け算を暗算で求める早業(4)・11 東京藝術大学の「陳列館」において……………	13
私の心に残る旅①-「恩施市」……………	14
中国の笑い話……………	16
みんなの広場……………	17
‘わんりい’の催し・お知らせ……………	18